生 命と は 何 カュ それ は 効 果である

このほど私は『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)という本を書きました。
このほど私は『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)という本を書きました。
このほど私は『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)という本を書きました。
とのほど私は『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)という本を書きました。
とのほど私は『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)という本を書きました。

た人物の名は、ルドルフ・シェーンハイマーといいます。 た。そこにはまったく別の生命観が暗示されていたのです。その発見を行った。そこにはまったく別の生命観が暗示されていたのです。その発見を行っました。 しかし、20世紀には、もう一つ非常に重要な発見がなされていまし機械論的な生命観は、20世紀の生命科学が到達した一つの答えではあり

真っ只中にあるのです。今、私たちを形作っている分子は半年か1年後にはもうここにした。すると食べ物の分子は、ネズミの尻尾、目の中、骨、心臓、肝臓などあらゆるとした。すると食べ物の分子は、ネズミの尻尾、目の中、骨、心臓、肝臓などあらゆるということです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成のいうことです。実は、分子レベルで見ると私たち生物の体は、絶え間ない分解と合成の分子を標識し、それをネズミに食べさせました。すると食べ物の分子を標識し、それをネズミに食べさせました。すると食べ物の分子を標識し、それをネズミに食べさせました。



表紙◎アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリの

Published in "Dessins" first published by Gallimard in 2006 and published in Japanese by Misuzu shobo in 2007 仲介:(株)フランス著作権事務所

- 技術に会う 11 生命とは何か、それは効果である 福岡伸一
- HITACHI FILE talk+
 - 1 世界初、環境負荷を減らす ハイブリッド車両が走る小海線 徳山和男
 - 2 再生医療用細胞の長距離輸送を 実現した定温輸送サービス 井沼俊明
- 8 特集 水の近代遺産探訪
 - ――生き続ける遺産、使い続ける技術
 - 琵琶湖疏水
 - --明治の総合開発プロジェクト
 - 横浜水道
 - ----日本初の近代水道
 - 16 三河島水再生センター
 - ---下水道の文化技術史
 - 黒部川第四発電所
 - ――戦後日本を象徴するモニュメント
 - 水の近代技術
 - ―何を、なぜ、どう使い続けるのか 高橋 裕
- 26 日立紀行 3 黒部

かつて、発電所建設のために敷設され、 今は観光客を乗せてひた走る

トロッコ電車

- 28 永瀬唯のサイエンス・パースペクティブ 11 冷蔵庫――「食」の貯蔵庫の発達史
- 33 ダントツさんが行く! 10 液晶テレビ
- 34 技術の日立 今昔 7 乾電池

ふくおか・しんいち……1959年東京生まれ。京都大学卒。ハーバード大学医学部研究員、京都大学助教授などを経て、 現在、青山学院大学教授。専攻は分子生物学。著書に、『もう牛を食べても安心か』(文春新書)、『プリオン説はほ んとうか?』(講談社ブルーバックス、講談社出版文化賞科学出版賞受賞)、『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書) などがある。2006年、第1回科学ジャーナリスト賞受賞。

され

合成されると

V

5

非常

リダイ

ナミッ

クな流り

れ

 \mathcal{O}

中に

成り

立

って

V١

る。

工

 \mathcal{O}

ようなパ

1

か

成

ŋ

立

0

て

1

る分

子

機

械

で

は

なく、

パ

ツ

自

体

が

常に

分

ル

で

は

お

変

わ

ŋ

あ

ŋ

まくり」

な

0

で

す。

私

たち

生命

体

0

身

体

は、

プラ

ŧ

デ

に会っ

た

同

士

が

お

変

わ

り

á

り

ませ

W

ね

送拶します

け

れ

分子

0

は

な

1

0

で

す。

す

×

て

食

物

0

分子と

置

き

換

わ

0

7

ま

ま

す。

思います

に否定

的

な

0)

で

は

あ

ń

ま

せ

ん

 \mathcal{O}

方法

を

使

0

7

生命

L

て安易

な

操

作

的

介

入を

味

不でミク

口

な

研

究

の

成

果です。

私

は

0

研究することに

ょ

いって

非常に多く

0

新

す。

ことに慎重

一であ

Ś

きだと思

0

71

るのです。

れ

が

工 対

1

7

0

発

兒

 \mathcal{O}

教

訓

得ら る部 こと れ 確 係によっ ま 局 す。 が 1 れ か 品 所 にミク ま あ 的 を なぜ 别 り はこ た。 てもたらされて ŧ 見 \mathcal{O} 口 なら 部 す。 ると、 な分子 れ 動 品 を、 的 平 7 衡 置き あ な カュ 生 生 レ 状 しこれ る 命 べ 態 命 換えると、 部 ル 1 は は 観 品と る効果だ 動 Ъ で 個 は 的 生 あ あ Þ あ る意 一命を な 0 る 巫 部 ま からで 衡

もともとそこに存在 機 械 論的 な 生命 て 観 VI に た 基 動 的 な平 方で 衡

で

Ъ

品

を

交換

す

れ

ば

効率

が

上

がる

ように

見

づ

見

民状態に

しある、

とい

11

ま

部 品 0 性 能が 支えて V る 5 ŋ は、 部 状 品

解 す。 ル べ 方法 い 態 知 同 が あ 自 識 士